

「非公式」の大使によるトラベル・ライティング — Sarah Birdの *Yokota Officers Club* —

渡久山 幸 功*

Travel Writing by an Unofficial Ambassador: *Yokota Officers Club* by Sarah Bird

TOKUYAMA Yukinori

要 旨

この小論ではサラ・バードによる小説 *Yokota Officers Club* における在沖米軍人家族の現実、及び、短期間の旅行者・滞在者の視点から描写される米軍占領下の沖縄社会を分析する。異文化接触のコンタクトゾーンである米軍占領下の沖縄の表象、及びアメリカ人による米軍に対する批判的視点を考察した。

キーワード：サラ・バード、トラベル・ライティング、沖縄表象、
米軍占領政策、反ベトナム戦争

“History is a Kaleidoscope that can be twisted in an infinite number of directions.” Sarah Bird

はじめに

近年になって沖縄人作家による文学作品が英訳されて米国内で紹介されているが、米国人作家による沖縄関連の作品はどのようになっているのだろうか。自費出版を加えるとこれまで20作弱の沖縄を舞台にした作品が出版されているが、特に今世紀に入って、10冊以上の作品が相次いで出版されており、沖縄がアメリカ文学のインスピレーションとして注目を集めているといえるかもしれない。その多くは、元在沖米軍人及び軍属家族が沖縄滞在の経験を生かしてフィクション化したパターンが多い。

もっとも有名な作品は1951年に出版された小説 *The Teahouse of the August Moon* (『八

* 沖縄大学地域研究所特別研究員 yukinoritokuyama@gmail.com

月十五夜の茶屋』)である。この作品は米軍政府の一員として沖縄戦に従事した Vern Sneider (1916-1981) が、彼自身の沖縄戦従軍体験をフィクション化した小説でベストセラーとなっている。この作品はのちに劇作家のJohn Patrick (1905-1995)によってアダプテーションが施された脚本がブロードウェイで上演され、当時としては珍しい日本語と英語によるバイリンガルの戯曲であるにもかかわらず、1953年から1956年にかけて当時の記録となる超ロングラン (1027回上演) の大ヒットとなった。また商業的だけでなく、批評的にも高い評価を受け、演劇界のトリプル・クラウンを独占している¹。その影響もあって、その後の全米巡業公演のみならず、ヨーロッパや南米諸国でも次々と上演が続き、OKINAWAの名を世界中に知らしめることになった。その後、1956年に日本の奈良でのロケ撮影を含む映画製作が行われた。この映画版も大ヒットの成功を収めている。

しかし、『八月十五夜の茶屋』以降、米国文学の分野における沖縄を舞台にした作品に目立った動きはないという状況だったが²、その状況を変えた作品が相次いで出版された。Sarah Birdによる *Yokota Officers Club* (2001) と *Above the East China Sea* (2014) である。前者は1960年代後半の米国軍の占領下の沖縄社会と文化及び米軍駐留の影響を描いており、後者は沖縄戦と在沖米軍基地の歴史的・政治的関連性の鋭い批評であり、恐らく米国人作家による沖縄を舞台にした作品群の中で最高傑作であろう。この2作品に共通することは、在沖駐留に対する批判的な視座であろう。この小論では、*Yokota Officers Club*における沖縄表象と米軍軍属がどのように日本復帰以前の米軍占領下の在沖米軍組織をとらえていたか考察してみたい。

Sarah Birdの経歴：

Sarah Bird自身のウェブサイト及びインターネット上の情報によれば、1949年にミシガン州アン・アーバーで米国空軍の父を持つBird家の6人兄弟の長女として誕生し、米国内外の米軍基地への転属を繰り返す幼少時代を過ごす。1973年にニューメキシコ大学を卒業し、1976年にテキサス大学オースティン校で修士号 (ジャーナリズム専攻) を修得している。

作家活動として1983年のミステリー小説 *Do Evil Cheerfully* の出版以降、これまで11冊の小説を出版し、最新作 *Last Dance on the Starlight Pier* を昨年出版している。ほとんどすべてのフィクションが彼女自身の実体験を基に書かれている。(その他にTory Catesの

¹ 米国演劇界のトリプル・クラウンとは、The New York Drama Critics Circle Award for Best American Play of the Year, the Pulitzer Prize in Drama, 及び the Tony Award である。

² Sneiderは、1960年に *The King from Ashtabula* を出版している。この長編小説は台湾と沖縄の間に位置する架空の諸島Nakashima Islandsを舞台に展開され、島民が住民投票で米軍政府によって体験したアメリカ民主主義ではなく数世紀前の王政体制への復古を選択するという内容となっており、基本的には『八月十五夜の茶屋』の二番煎じ的な作品である。小説は沖縄文化のオンパレードとなっており、第二の沖縄小説である。この小説は米国国内では商業的には売り上げを伸ばしたが、映画化されるような大きなインパクトはなく、沖縄ではほとんど知られていない。

ペンネームでロマンス小説を6冊、2016年にはノンフィクション*A Love Letter to Texas Women*も出版している。)彼女の作風の最大の特徴は、人物造形に優れていることであり、登場人物の会話のやりとりがウィットに満ち、ユーモアのセンスに溢れている、読んでいて楽しい、喜劇的なストーリーが多く、彼女のファンに最も愛されている要素である。1990年には*Don't Tell Her It's Me*の映画脚本を手掛けているが、これは前年に出版された彼女の3作目の長編*The Boyfriend School*の映画化である。テレビの脚本を積極的に取り組み、ニューヨーク・タイムズ・マガジン、テキサス・マンスリー、シカゴ・トリビューンなど全国誌の雑誌記事にも寄稿している。20年以上の脚本家キャリアにおいて、パラマウント、CBS、ワーナー・ブラザーズ、ナショナル・ジオグラフィック、ABC、TNT、Hallmarkのほか、いくつかの独立系プロデューサーと仕事をしている。沖縄を舞台にした米軍の家族を描いた*The Yokota Officers Club*を出版した2001年にはテキサス州「オースティン市の最高作家」に選出され、2015年にはMeryl Streep / Oprah Winfrey脚本家Labに選出されている。2016年には過去の沖縄戦と現代の在沖米軍基地をテーマにした第二の沖縄小説*Above the East China Sea*を出版している。Sarahは夫のGeorge Jonesとの間に一人息子がおり、現在、テキサス州オースティンに住んでいる。

Yokota Officers Club (2001) のあらすじ：

ストーリーは、一人称ナレーターを採用し、著者の分身である主人公 Bernie Root (18歳)の眼を通して語られる。一年間、カトリック系の8名家族と離れてニューメキシコ大学に通学していたが、大学の夏休みを利用して家族と夏休みを過ごすために、Bernieは初めて沖縄を訪れる。しかし、一年間、非軍隊組織の環境で過ごしたためか、家族の様子に違和感を覚える。嘉手納空軍基地に赴任している父Mace (米空軍少佐)は、軍人のプロフェッショナルリズムを相変わらず家庭に持ち込んでいるのだが、母親Moeは一日中ベッドから出ず、妹Kitは良からぬ連中と付き合い不安定な行動が目立つ。家族は機能不全寸前という状態であった。そんな折、母親Moeの勧めもあり、Bernieはダンス・コンテストのトライアウトに妹Kitとともに参加する。ダンスが得意なBernieはコンテストで優勝し、三流コメディアンBobbie Mosesのステージ・パートナーとして東京にあるいくつかの米軍基地をツアーすることになる。夏休みのアルバイトとなるこの2週間のツアーの仕事には、もう一つの目論見があった。それは、所在不明で音信不通となっていたFumikoをBernieに探してほしいという母親の希望である。Fumikoとは8年前に横田基地に住んでいた時のRoot家のメイドで、当時Moeにとって親友的な存在となっていた。ツアーの最後に、Fumikoと再会することができたBernieは、当時まだ幼く理解できなかった謎の事件の真相・秘密に関してFumikoの口から語られる際に、終戦直後のFumikoの過去に引き戻される。その謎の事件とはFumikoが突然メイドの職をやめさせられ、その後しばらくして父親に転属命令が出たためにRoot家が横田基地を離れて帰国するきっかけとなった事件である。8年経ってその

真相を初めて知るBernieであるが、それが米軍の秘密軍事工作作戦に関わりがあることが判明し、父親の突然の転属を命令される処分責任はBernie自身にあったことを知る。何故なら彼女がその極秘作戦をほかの軍属の子どもたちにもらしてしまったからである。Bernieはツアーの最終日に台風が接近しているにもかかわらず、家族の待つ沖縄にグアム行き軍用機で戻るのが、嘉手納空軍基地の滑走路にある展望デッキで父Mace以外の家族全員が心配しながら彼女の到着を待っているのを目のあたりして、家族の大切さを認識すると同時に、家族（より正確には軍隊組織）との決別を決意して物語は閉じる。

米軍家族の特殊な環境と再生のテーマ：

Sarah Birdは彼女の自伝的な体験を基に沖縄を舞台にした小説を構想したが、1968年の彼女の沖縄滞在は実際には数か月にも満たないものだった。2001年に出版された*The Yokota Officers Club*は、そのような短期間の体験を題材にして、世界中の米軍基地を転々とする軍人家族の生活を描いた稀有な物語である。彼女がこの小説を執筆した理由は、米軍基地が世界中に展開しているにもかかわらず、一般の米国市民にはベールに包まれていた軍人家族の実態を描写した2冊の書籍に出会ったことによる。それはPat Conroyの小説*The Great Santini* (1976) 及びMary Edwards Wertschの*Military Brats: Legacies of Childhood Inside the Fortress* (1991) で、後者は80人の軍属の子どもたちをインタビュー・調査した研究である。国外の米軍基地を転々とすることを余儀なくされるため、狭い人間関係しか築き上げることができない軍人家族のメンタリティを米国読者に知らせることは重要であるというSarahの信念がこのユニークなストーリーを書き上げた³。

物語は沖縄を紹介するパンフレットに印刷されている第36代米国大統領Lyndon Johnsonのメッセージから始まる。そして、米国市民としての軍属の心構えとして次の言葉でメッセージは締めくくられている。

After World War II, the island remained under U.S. military control. The United States will continue its custodianship as long as conditions of threat and tension exist in the Far East. Bear in mind as you begin your tour that the serviceman's family is just as much a representative of the United States Government as serviceman himself. (YOC p.3)⁴

³ その他の米軍軍属の家族に関する書物にWilliam Wills *Base Jumping: The Vagabond of a Military Brat* (privately printed edition, 2013) 及びJames Lamont *The Generals's Children: American Families in Occupied Japan* (St. Petersburg, Florida: BookLocker, Inc., 2017) があり、前者は軍人家族の息子であった著者の十代の頃の回顧録で、第6章には沖縄滞在が記録されている。後者は占領下の日本に赴任した家族の回顧録となっている。

⁴ *The Yokota Officers Club* (New York: Ballantine Books, 2001) は、これ以降はこの版に依拠しYOCと記す。

沖縄に向かう機内で目にしたJohnson大統領のメッセージは、主人公Bernieにその8年前の1960年に初めて横田基地に家族で転属した時に読んだEisenhower大統領のメッセージを思い出させる。そこにも軍人と軍属は、ホスト国との親善をつくる努力をし、米国が友好国であり、世界平和と米国の繁栄と安全保障を促進する国を代表する任務が海外赴任の兵士とその家族にはあるという主旨が書かれていた（YOC p.11）。つまりは、兵士と同様にその家族も米国を代表することを忘れないように、と訓示しており、米国市民にふさわしい行動をとることを要求している。しかし、Roots家族が家政婦を雇っていないこともあるのか、地元の沖縄人との接触・交流はほとんど描写されていない⁵。

日本復帰以前の米軍占領下の沖縄における米国と沖縄の女性同士の遭遇・交流を網羅的に調査したハワイ大学マノア校のMire Koikariによれば、米琉の女性の民間交流は積極的に促進されたが、それは純粹に沖縄の生活の質や公衆衛生の向上を目指したというよりは米軍の沖縄駐留をスムーズに遂行するための副次的なものに過ぎなかったという。つまり、相互理解よりも共産主義の脅威から東アジアを防衛する在沖軍事作戦への沖縄側の理解を深めるというものだった（Koikari pp.1-4）。Donna Alvahも沖縄における米軍軍属の女性としての「母性的」役割を次のように看取している。

American women who positioned themselves as maternal protectors attempted to ameliorate the military's impact on the lives of Okinawans, yet simultaneously furthered perceptions of Okinawans as a childlike people in need of American guardianship. This *maternalism* tried to ease the negative effects of *paternalistic* military control while reinforcing justifications for the Cold War domination of Okinawa by the United States. (Alvah pp.168-69 Italics original)

軍隊は父性性、軍属である妻たちは母性性があり、一方で沖縄人は米国の庇護が必要な子どものような存在とみなされている。この母性性は、軍隊の家父長制的な悪影響を和らげながら、冷戦期の米軍による沖縄占領の正当化を強化する役割を担っていたという。このような認識は、典型的なオリエンタリズムを反映している⁶。

⁵ 地元民との交流として、基地ゲートにおける基地反対運動の抗議者（YOC pp.119-120）やBernieがダンス・コンテストに参加する時のコスチュームをオーダーメイドする時、コザの街に出向き、沖縄人女性の裁縫師とのやり取り（YOC pp.142-146）があるが、母親Moelは、横田基地に住んでいた時に覚えた片言の日本語を使ってフレンドリーに対応している。彼女の日本人観は次のようなものである（“Japanese are only dangerous to strangers. All we've got to do is to stop being strangers.” p. 120）。

⁶ Christina Kleinのオリエンタリズムの機能は、米国と沖縄の関係性を説明している。“Orientalism constructed the “East” and the “West” as internally coherent and mutually exclusive entities; . . . Orientalism worked as an instrument of Western domination . . . by defining the East in relation to the West through a series of oppositions, each of which

母親Moeは家政婦（メイド）を雇うことなく（8年前の横田基地での事件のためにあるいは雇うことを許されておらず）、一日中ベッドから出てこない。そのためキッチンをはじめ、家の中は荒れ果てている状態を見て久しぶりに家族のもとに戻ったBernieは落ち着かない。さらに、極秘の任務で家を空けることが多い父親Maceの仕事の影響もあって、両親の仲はぎくしゃくしている。お互いに話をめったにしないなど不穏な空気が流れ、子どもたちに何らかの悪影響を与えていた。夫との仲がうまくいっていないこともあり、「非公式な」大使として、表面的な米琉親善交流に参加しないことによって間接的にも米軍駐留に有利になるような行動をとらないMoeの母親像に米軍組織への批判が込められているとも考えられる。Moeが米軍の信頼を失うきっかけは、8年前に軍事極秘任務が公になったことで処罰されたことだったが、物語の最後になってようやくその任務と別の基地へと転属の真相が明かされるミステリー仕立てになっている。しかし、当時10歳だった主人公Bernieにはその処罰の詳細が理解できなかったのだが、極秘任務の漏洩がBernie張本人だったということが判明する。それはメイドのFumikoが、任務から帰ってこない父親をとっても心配している彼女に親切心から父親の部隊に何か大変なことがあれば、既に大事が起こっているはずだから、何もいってことは、その作戦部隊が無事であることを漏らしてしまう。その秘密の任務は、Fumikoが愛人関係にあったMajor Wingo（父Maceの上司）から聞いていたことであった。

“You can never tell anyone,” Fumiko had told me. “You have to swear.”

I stopped crying and sat up on my bed, alert. The secrets you weren't allowed to tell were always true. “I will.”

“No one.”

“Cross my heart and hope to die.”

“They are in Alaska. If they had been shot down, your country would be at war with Russia. They will be home soon.”

“But how do you now?”

Fumiko makes me swear one more time that I will never tell anyone.

“Major Wingo told me.” (YOC p.328)

しかし、口外しないと誓っていたにもかかわらず、同じく父親たちが帰還しないために心配している子どもたちにBernieは、その任務をうっかりばらしてしまう。それは、大国米ソ間

located the East in a subordinate position. It presented the West as, for example, rational, progressive, adult, and masculine and the East, in turn, as irrational, backward-looking, childish, and feminine. This binary logic constructed the East as an inferior racial Other to the West, and legitimated European imperialism by overdetermining the idea of Western superiority. (Klein pp. 10-11) このようなオリエンタリズム言説にみられる二項対立が沖縄占領を正当化するバックボーンであることは間違いない。

の戦争勃発になりかねない危険な任務が遂行されていた、といういかなる理由があろうと外部に漏れてはいけない極秘事項だった。その責任を取らされて家政婦Fumikoは解雇されたが、日本での生活で唯一信頼できる友人だったFumikoを失ったMoelは、夫Maceと米軍組織に激しい怒りをぶつけてしまう。この件に関連して連帯責任をとらされた父親は出世ルートから外されてしまう。数日のうちにRoot家は横田基地から米国内の基地への転属命令を受ける。

この逸話は、軍人の家族が軍隊組織と一体であること、そのために軍の論理や作戦が最優先されるコミュニティーに属する軍属にも暗い影を落としている真実が示唆されている。軍隊の論理の理不尽さや厳しい規律が兵士の家族の運命を左右しかねない緊張感の漂う空気が小説全体に流れている。1年ぶりに家族と再会したBernieは、軍隊コミュニティーの特異性を再認識する。

I was returning to a world where officer fathers lost their jobs when sons didn't mow the lawn, when daughters dated GIs, or when mothers misbehaved too often at Happy Hour. Who knew what happened when offspring allied themselves with groups that advised draftees to swallow balls of tinfoil and put laundry detergent in their armpits to fool induction center doctors? (YOC p.8)

ニューメキシコ大学で反戦団体 (Damsels in Dissent) に所属し、徴兵された若者を徴兵検査で不合格にすることに協力するBernieの個人ファイルがOSI (Office of Special Investigation) に存在している (YOC p.87)。軍属も監視対象になり、家族の振る舞いで父親が解雇されるという軍隊組織の特殊性は、家族内で緊張を生み出さないわけがないだろう。特に、Root家の場合は、常に秘密を抱える特殊な職業のために父親は家庭内でも口数の少ない態度を貫くことを余儀なくされ、コミュニケーションが不十分な機能不全の家族になっていくことも不思議ではない。軍事優先の方針に翻弄される特殊な家庭環境は、個人の精神・成長に大きな影響をあたえていると信じるBirdにとって、この小説のテーマは、機能不全の家族の再生 (絆の回復) なのである⁷。

訪問者の沖縄の描写

8年ぶりに日本の米軍基地に転属されたRoot家は、沖縄をどのように観察し、認識しているのだろうか。沖縄の動植物、基地周辺の繁華街、基地反対・復帰運動、嘉手納カーニバ

⁷ Birdはインタビューの中で人間関係と出自を注視したと言い、Root家の名前の意味を語っている。“I will say that in both *Yokota Officers Club* and in *Above*, I spend a lot of time looking at connection and ‘rootedness.’ I gave the military family in *Yokota* the last name of Root because that is service members and their dependents don't have” (Lowry).

ルの模様など詳細に描写されている。その時、地元民との積極的な交流がないため、説明的な筆致が目立つが、これは沖縄の事をほとんど知らない米国人読者に沖縄のことを知らせる意味合いがあるのは明らかである。太平洋戦争後半世紀を経た2001年でさえも沖縄戦の説明をしなければならないことは、米国民の沖縄の非認知度を反映した描写だととらえても差し支えないだろう。

YOCはノンフィクションではないが、トラベル・ライティング言説の一形態だといってよいだろう。主人公でナレーターのBernielは、沖縄初訪問の旅行者であり、他の家族も沖縄に1年間ほどしか滞在していないため、まだ旅行者的な感覚を持ちあわせていると見なしてもおかしくない。YOCにトラベル・ライティングの要素を見つけることはたやすい。なぜなら沖縄は米国が支配している極東地域の植民地であるからだ。Justin D. Edwardsによれば、トラベル・ライティングはかつて植民地政策を後押しする重要な役目があったという。

Travel writing was vital for supporting the Orientalist project and became an increasingly popular genre for audience back home who wanted to read about how European colonial powers were engaging in “discoveries,” missionary projects, military conflict, and trade. These travel narratives included seemingly objective accounts of “other” places and peoples that constructed distinctions between “the Orient” and “the Occident,” which supported imperialist expansion through depictions of “the East” as inferior. As a result, these texts were linked to socioeconomic and political structures that sought to justify colonization and garner institutional support for imperial expansion. (Edwards, p.22)

自国の優位性と植民地政策の正当化を強化するトラベル・ライティングは、珍しい異国文化の発見、軍事紛争、布教活動、貿易にかかわる植民地政策を知る重要なメディアであるが、そこには報告者の無知ゆえの偏見からオリエンタリズムの描写・説明がみられ、自分たちとは異なる劣等な「他者」を構築し、西洋諸国（白人）の植民地拡張を支持する言説が多い、という。しかし、YOCをトラベル・ライティングの一形態と見なす際に、留意しなければいけない点がある。それはBirdがノンフィクション（回想録・旅行記）ではなく、フィクションを創作したことであり、それは沖縄に関するリサーチを丹念に行ったことを意味しており、「観察する私」（“seeing I” Edwards, p.20）の実体験・観察だけではなく、著者自身の問題意識やヴィジョンが表明されていることを認識することは非常に重要なことである⁸。

⁸ Sarah Birdは家族との対話で、同じ家族一人一人にも異なる記憶があるため、Bird家の公式な回顧録ではなくフィクションにこだわった理由を次のように説明している。“I wanted to go beyond the puny details of my own puny life and try to tell a bigger story.” (“A Reader’s Guide: A Conversation with Sarah Bird” in *The Yokota Officers Club*)

学校の地理の授業の課題で、テーマに沖縄を選択した妹Boscoの口を通して、悲惨な沖縄での地上戦の日米両方の兵士の戦死者数と沖縄の非戦闘員の死者数を明示し、戦後になっても爆弾に使用された化学物質が土壤にあまりにも多く残っているために何も育つことできない土地があることや、不発弾で足を失った子どものエピソードを説明するなどして、さりげなく沖縄戦の「後遺症」を紹介している（YOC p.44）。

また、特徴的なのは、米軍人にとって沖縄は性産業のイメージで溢れているということだ。娯楽の少ない1960年代の基地周辺の繁華街は米兵相手の娼婦・バーのホステスの呼び込みが猥褻極まりない言葉で表現され、“You want three-holer? I do three-holer.” [YOC p.26]）、沖縄以外ではお目にかかれない風俗業の広告のキャッチコピーが書かれている（“Unguibus et Rostro. “Ugly Butts and Roosters, nowhere else but Oki”” [YOC p.30]）。戦後日本から切り離され、米軍政府の支配下で、米国政府からの財政的な援助が充分ではなく、貧困状態が続いた沖縄は発展途上の地域のように米国人の眼には映ったであろう。圧倒的に多い男性で構成される基地周辺の地域では、性産業は米軍人の数少ない娯楽であり、地元経済の主要産業になることは自然なことであった。しかし、「非公式の大使」を担うはずの米軍人が本国から遠く離れた外国の地でこのような性搾取を日常的に行っていることに対する批判を暗示させるコザの街の描写である。

これらの否定的な沖縄のイメージは、米国人読者に強い印象を与えることは容易に想像できるため、無視することはできないが、これらのイメージはほとんどすべてが沖縄戦とその後の米軍占領政策に起因するものであり、沖縄固有の現象ではない。つまり、沖縄戦の爪痕及び米軍文化が反映されたイメージにすぎないのである。Birdは1960年代の米国防省サービス会報（*DoD Service Bulletin* “Welcome to Okinawa”）の一部（“HAZARD SECTION”）をそのまま掲載している。そこには沖縄任務の注意事項が書かれており、亜熱帯気候、ハブ、マラリア蚊、不発弾、風土病、台風などの情報が簡潔に説明されている（YOC pp.61-62）。ほとんどが21世紀の沖縄生活にも通用する有益な情報であるが、沖縄が魅力的に見えず、沖縄任務に対して心配が募る内容であることも否めない。指摘しなければならないことは、これはBird本人の文章ではなく、国防省の沖縄観が反映されているということである。小説全体を通して、沖縄社会のネガティブな描写が多いにもかかわらず、そのほとんどすべてが米軍基地に起因するものであり、コンタクトゾーンにおける文化衝突の瞬間にありがちなオリエンタリズム的な偏見やステレオタイプの描写ではないということである。言い換えれば、1960年代の沖縄というトポスにとって在沖米軍基地が絶対的な「場所の感覚」（“sense of place”）として機能していること、つまり、良くも悪くも米軍基地が中心であった沖縄社会であることを示唆する、一種のルポルタージュ・フィクションとなっているといえるだろう。

米軍基地・米軍組織・ベトナム戦争批判

Birdが米軍基地や軍の論理にもかなり批判的であることは特筆に値するだろう。特に、

近隣住民にお別れの挨拶もできず、一夜にして跡形もなく引っ越しを余儀なくされる恐怖を抱く軍属の家族の懸念は、一般市民には理解しにくい現実である。Bernieは、これまで過ごした様々な米軍基地を特徴づける広大な嘉手納基地を眺め、建物が密集したコザの街と比べる時米政府の税金の乱費に初めて気付く（*YOC* p.31）。しかし1960年代後半では、アジア最大の滑走路がある嘉手納米空軍基地は米軍人にとって太平洋のジャンクヒープ（ゴミ集積場）のような場所だとも認識されていたようで、父親は“Kadena Air Base, the elephant graveyard of the Pacific. Where military careers come to die. Where the deadwood is farmed out to rot away.”（*YOC* p.30）と皮肉っぽく初めて沖縄に足を踏み入れた娘Bernieに説明している。ベトナム戦争中の軍事任務に関しても、母親Moeの批判は強烈である。

“C-one-forty-one . . . They take off and land all night long. Cargo planes going to Vietnam . . . B-fifty- two. Can you hear the difference? . . . A plane takes very three minutes. Do you realize how much fuel that is? A million gallons every day. A million.”（*YOC* pp.52-53）

爆音を聞いてその戦闘機の機種を当てることができるほど戦闘機の離発着は昼夜問わずあまりにも頻繁に行われているため、燃料が無駄に使われていると感じているのである。

*YOC*では、米国愛国主義・ナショナリズムに傾倒せず、米軍コミュニティ外部の情報・文化・自由に対する真の理解の必要性を示唆している。例えば、母親Moeの米国軍人家族の婦人たちとの付き合いは、かなりぎこちなく、特に在沖米軍基地内の生活の閉塞感によるフラストレーションは、子どもたちにも感じられている。Bernieの小学生の妹Boscoは次のように母親を観察している。

“Christina Kelso’s mother says that Kit is just a big P.R.I.C.K tease and that she’s going to get into more trouble . . .”

“Gosh, Christina’s mother must not have much to worry about.”

“Nobody does. Not here. Mom says that’s the problem. That’s exactly why she hates living on-base, and it’s ten times worse here than any other place we’ve ever lived, and the officers’ wives are the cattiest bunch of bitches she’s ever seen, and the less we have to do with any of them, the better. That’s why she hates it so much and never gets up. She sleeps all day . . .”（*YOC* pp.44-45）

Fumikoのような友人（日本人メイドであるが良き相談相手だった存在）がいない狭い沖縄で、特にフェンスで囲まれている米軍基地内の住宅に住むようになれば地理的閉所恐怖症になっても不思議ではない。

大学でベトナム反戦グループに所属するBernieを問いただす二人だけの会話で、父親Maceは徐々に興奮していき、彼の自論を吐き出す。ベトナム戦争を歴史上誰も体験したことのない戦争だととらえ、ペンタゴンが北ベトナム軍の防衛力を過小評価していると批判する。

“No one’s ever fought at a war like this before, where you hand the enemy your ass on the platter, then have to snatch it away and hit him over the head with it It’s a parody of the war. An expensive half-ass intervention in the wrong cause in the wrong country in the wrong part of the world” My father gives a comradely gasp of exasperation now that we both agree on how ridiculous this war is “Pay every man, woman, and child in North Vietnam what –thirty thousand? Forty? Hell, pay ‘em fifty thousand a year for life. It’ll be cheaper than what we’re doing now That you can build thirty-five –*thirty-five!* – elementary schools for what one strategic bomber costs and that good schools were going to keep American a hell of a lot safer in the long run than B-frigging-fifty-tvos.” (YOC pp.105-106, My underline)

父親の極端な自論は、実は、植民地の経済的自立の必要性を繰り返し強調するVern Sneiderの見解と酷似している。つまり、長期的には、軍事的支援よりも経済的援助（特に教育制度の充実）の方が他国に米国をより理解させ、そして両国間の友好な関係を築けるという見解である⁹。

おわりに

Vern SneiderとSarah Birdは両方とも沖縄人の立場を理解し、同情的な眼は同じだが、最も顕著な差異は米軍組織に対する態度であろう。Sneiderは戦後直後の沖縄の米軍政府の施策に懐疑的で、米軍優先の占領政策を批判しているが、米陸軍に従軍していたことに誇りを持っていため、軍隊組織への批判は希薄、あるいは楽観的である。一方、Birdの米軍組織に対する批判的な視座は鋭い。恐らく彼女が学部・大学院で学んだジャーナリズム倫理が関係していると思われる。彼女はあるインタビューで海外展開する米軍基地の費用と軍産複合体の税金の流れについてコメントしている。

⁹ Vern Sneiderの沖縄小説2作品（*The Teahouse of the August Moon*及び*The King from Ashtabula*）とも共通して占領地域の経済的自立をゴールとする占領国の経済援助を重要視するメッセージが込められている。

There's a basic rule of journalism: Follow the money. My wish is that the military-industrial-Congressional-intelligence industry would be stripped of its “dark budges” and tricky account practices and forced to give an accurate accounting of the colossal sums it is spending. If there ever were a time when America could afford such extravagance, it is long past We need this basic information to see that, as a nation, we can no longer afford to write blank checks to a military controlled by those whose jobs, whose corporate bonuses, whose congressional seats depend on our country being, forever, at war. (Lowry)

抜粋したSarah Birdの軍隊批判、戦争依存、国家の軍事政策に偏った外交政策への批判的なコメントはYOCに反映されている。米軍占領下の沖縄社会に関心のある人にとっては、米国人の眼から見たOKINAWA及び基地内の特殊な空間を垣間見ることができる貴重なテキストとなっている。父親が職業軍人であるにもかかわらず、米国の軍事基地海外展開を客観視し、自己批判的な考察をすることができるのは、Sarah Birdが沖縄の歴史と状況に対して十分な理解と共感があるということを示している。

謝辞：

第62回 日本アメリカ文学会年次全国大会（2023年10月21日 於札幌学院大学江別キャンパス）で口頭発表した原稿（「非公式」の大使から魂の救済者へ—Sarah Birdの沖縄小説—）の一部である。本研究は科研費（研究課題番号26370322及び20K00442）の助成成果の一部である。

Works Cited

- Alvah, Donna. *Unofficial Ambassadors: American Military Families Overseas and the Cold War 1946-1965*. New York: New York UP, 2007.
- Bird, Sarah. *The Yokota Officers Club*. New York: Ballantine Books, 2001.
- . *Above the East China Sea*. New York: Vintage Books, 2015.
- Bird, Sarah with Steve Rabson. “Above the East China Sea: Okinawa During the Battle and Today” *The Asia-Pacific Journal*, Volume 11, No.2., June 2014. (1-11). <https://apjjf.org/2014/11/22/Steve-Rabson/4124/article.html> (2023/10/20 Accessed).
- Edwards, Justin D. “Postcolonial Travel Writing and Postcolonial Theory” in *The Cambridge Companion to Postcolonial Travel Writing*, ed. Robert Clarke. Cambridge: Cambridge UP, 2018. 19-32.
- Klein, Christina. *Cold War Orientalism: Asia in the Middlebrow Imagination, 1945-1961*. Berkeley: U of California P, 2003.
- Koikari, Mire. *Cold War Encounters in US-Occupied Okinawa: Women Militarized*

Domesticity, and Transnationalism in East Asia. Cambridge: Cambridge UP, 2015.
Lowry, Mary Pauline. “Q&A With Sarah Bird About Her Novel *Above the East China Sea*” Huffpost. (Updated Dec 6, 2017). https://www.huffpost.com/entry/qa-with-sarah-bird-about_b_5509209 (2023/10/20 Accessed).